

## オリエンタリズム批評のあとさき

——原点としての『エジプト誌 *Description de l’Egypte*』

杉 本 淑 彦

オリエンタリズムという言葉の初出は、英語（Orientalism）では1769年、フランス語（orientalisme）では1799年のことである。いずれも、フランスを筆頭にヨーロッパ諸国で綿々とおこなわれてきたオリエン特諸語の学術研究を意味していた。そして19世紀なかばになると、フランスとイギリスを中心にヨーロッパ諸国で、オリエン特を背景とする絵画や文学、さらにオリエン特風の衣裳や建造物が流行するようになり、とくに、オリエン特を画題にする絵画群が、オリエンタリズムとよばれるようになった。フランスの『19世紀ラルース百科事典』（1866年版）は、こうした状況を踏まえ、オリエンタリズムを「オリエン特の言語、科学、風習、歴史についての知識」および「オリエン特の風習の模倣」と定義したのであった。

なお、ここでのオリエン特とは、北アフリカ・近東・中東からインド・中央アジア・東南アジア・中国、そして極東（朝鮮・台湾・日本）にいたる広範な地域を意味していたが、19世紀、近代フランスにおける関心の中心は、距離的に近く、勢力拡張の対象であった北アフリカとレヴァント地方にあった。エスニック・宗教上の漠然とした括りでいえば、アラブ・イスラーム地域である。

オリエン特を対象とする学術研究や、かの地の風習の模倣という意味で使われていた「オリエンタリズム」という言葉に、パラダイムの転換がおきたのは、エドワード・W・サイード（1935～2003）の『オリエンタリズム』（今沢紀子訳、平凡社、1986年。英語版1978年）以降のことである。サイードは18

世紀後半から 1970 年代までをおもな射程に入れ、中近東イスラーム世界（オリエント）に対する西洋（オキシデント）の差別的眼差しこそが「オリエンタリズム」だと批判したのである。サイドはパレスチナに生まれたアラブ人で、第一次中東戦争（1948 年）の難を逃れてカイロに移住した後、アメリカ合衆国へ留学。その地で比較文学の研究者となった人物である。オリエントで生まれ育ち、その後ながらくオキシデントで生活してきた人物だからこそ、こうした批判的視点を獲得しえたのかもしれない。

サイドは著書の序説において、「簡単に言えば、オリエンタリズムとは、オリエントを支配し再構成し威圧するためのオキシデントの様式」であり、オキシデントはオリエントに負の本質的属性を割りあてオキシデント対オリエントという優劣二項対立で世界を認識してきた、と主張する<sup>1)</sup>。サイドはもっぱら文学作品と、思想および言語学を分析するだけにとどまったが、この主張は、人文科学の他分野でも支持を集め、分析対象が中近東イスラーム世界外へも広げられつつ絵画や映画などへの批評にも使われるようになった。日本ではこれ以降、「オリエンタリズム」とカタカナ表記した場合は、この批評理論（オリエンタリズム批評、あるいはオリエンタリズム論ともよばれる）を意味することになる。オリエンタリズム批評は、提起されてからのこのおよそ半世紀、人文社会科学の傑出した批評理論であり続けている<sup>2)</sup>。

サイドの『オリエンタリズム』は膨大な書物と事件を取り扱っているが、とりわけ重要な位置を与えられているものとして、ナポレオンを総司令官にしておこなわれたエジプト遠征（1798～1801 年）がある。遠征による「占領はまったく文字どおり、近代的かつ全面的なオリエント体験を生み出した」のであり、ナポレオンの遠征は「いわば近代オリエンタリズムに可能性を与えた最初の経験である」という具合である<sup>3)</sup>。

サイドが扱っている「オリエント」は、おもにアラブ・イスラーム社会であり、かつ、18 世紀以降のイギリスとフランス、および現代アメリカの「オリエンタリズム」が批判の主対象になっているのだから、彼のオリエンタリズム批評のなかで、近代フランスによるアラブ・イスラーム社会侵出の嚆矢であ

るエジプト遠征が重視されたのは、当然のなりゆきだろう。

この小論は、オリエンタリズム批評の基礎素材といえるエジプト遠征について、遠征に関わった人物たちの言説を分析することで、その批評理論の有効性と問題点を検証することを目的としている。

まず、遠征のあらましを述べておこう。遠征は、1798年5月にナポレオンを総司令官とする約5万のフランス軍が、167名の学者・学生とともに、南フランスのトゥーロン港を出発したことに始まる。海路でエジプトに渡ったフランス軍は、7月にアレクサンドリアを占領した後、「ピラミッドの会戦」でエジプトの支配層たる軍閥勢力のмамлюークに勝利し、カイロに入城。翌年には、エジプトの名目上の宗主国であるオスマン帝国軍を相手にシリア戦役を開始し、緒戦には勝利を重ねるものの結局は敗退してエジプトへ撤退。そして同年夏、ヨーロッパにおいて対仏同盟諸国との戦況が悪化したとの報を受け、ナポレオンは戦線を離脱してフランスへ帰国。代わりに総司令官に就いたクレベールが1800年6月にカイロで暗殺されると、次の総司令官ムヌの下で、フランス軍は敗色をますます濃くしていく。最終的には、イギリス軍が1801年3月にエジプトに上陸し、同年8月にフランス軍は本土への帰還を条件として降伏。ここに遠征は幕を閉じた。

## 1. 「オリエンタリズム」としての『エジプト誌』

エジプト遠征の国定報告書として、『エジプト誌 *Description de l’Egypte*』という膨大な論説・図版群がある。全23巻、総重量120キログラム。最大の巻は縦108、横70センチメートル。総数約3000点の図版が収載され、論説部分の総ページ数は9000を超える。

執筆陣は、2名をのぞいて全員が、遠征に同行した学者・学生たちである。報告内容は、動植物分類などの自然科学だけでなく、音楽や経済学などの人文社会科学にもおよんでいる。もちろん、古代建造物も測量などの対象だった。

初版は1000部印刷され、その約半数が執筆者と遠征軍将校に、そして残余

が、ナポレオン帝国の衛星国ならびに同盟国の宮廷や、図書館などの公共施設に配布された。

編纂事業は1802年2月6日付政令によって正式スタートしたが、図版の作成に手間取り、初巻が完成したのは1810年初めのことだった。さらに、ナポレオン体制が最終的に崩壊した1815年段階でも、全23巻のうち公刊済みは半数に満たなかった。『エジプト誌』初版が完結するのは、ブルボン復古王政下の1826年のことである。

サイドは『オリエンタリズム』のなかで、オリエンタリズム批評の照準を、エジプト遠征のこの国定報告書『エジプト誌』にあわせている。『エジプト誌』は、「一国が他国を集団的に大規模に専有しようとする企て」であり、「オリエンタリズムの投射図像のさまざまな相貌」が「そのなかにそっくりそのまま実現されている」というのである<sup>4)</sup>。そしてサイドは、多数にのぼる『エジプト誌』所収論説のなかから、巻頭の「歴史序説」をもっぱら狙上にしたのだった。サイドにならって、まずは「歴史序説」を以下に分析しよう。

執筆者は『エジプト誌』編纂委員会委員長ジャン＝バチスト・ジョゼフ・フーリエ(Jean-Baptiste Joseph Fourier)である。遠征下のエジプト現地では、遠征軍将兵とフランス本土政府向けの広報誌『エジプト通信』の編集主幹を務めていた数学者で、帰国後は、フランス南西部イゼール県の知事に任命されるなど、ナポレオン体制内の要職にあった人物である。他の論説のおよそ二倍ほどの大活字で印刷され、巻頭を飾っている「歴史序説」は、『エジプト誌』の総論として位置づけされており、ナポレオン政権の公式なエジプト遠征論だったといえる。軍事・行政両面で多忙だったナポレオン自身も、『エジプト誌』所収の論文のなかで唯一この序説だけには、原稿段階で目を通したのだった。サイドが「歴史序説」をもっぱら取り上げたのは、資料選択として、けだし当然だったといえるだろう。

155ページにおよぶ大論文「歴史序説」は、こんなふうな主張で始まる――

エジプトの地にまつわる想い出は、どれもこれも壮大なものばかりであ

る。まず、その地は科学と芸術の祖国であり、そのことを示すモニュメントが数限りなく残っている。……(中略) ホメロスにリュクルゴス〔前八世紀スパルタの立法者〕、ソロン〔前六世紀アテナイの立法者〕、ピタゴラス、プラトン。彼らはエジプトにおもむき、科学や宗教、法律を学んだのだった。さらに、アレクサンドロスがエジプトに豪華な町を築きもした。その町は交易の中心地として久しく勢威を誇り、そこを舞台にしてポンペイウスとカエサル、マルクス・アントニウス、アウグストゥスが、ローマと全世界の運命を決する争いを演じたのだった。諸民族の将来を方向付ける名高き王者たちの関心がこの国に集まるのは、けだし、この国の避けられぬ運命である。

西洋においてもアジアにおいても、大国となる力のあるものなら、エジプトを、いわば天与の専有物と見なしてきたのである。したがって、一時代の精神に、交易に、そして大国の政治に影響を及ぼすような大事件が起これば、それはかならず、ナイル河畔での戦争へとつながっていった。歴史をひもとけば気づくにちがいない。ペルシア人が、そしてマケドニア人が、ローマ人が、アラブ人が、オスマン人が、それぞれの時代にあって、さまざまな民族の上に立つものとして勃興するや、かれらはこのエジプトを手に入れ定住したことを<sup>5)</sup>。

ようするに、ナポレオンはアレクサンドロスらに匹敵する王者であるからエジプト遠征を断行した、とフーリエはいいたいのである。別言すれば、ナポレオンに体现されているフランスは、他を制する主体であり、一方のエジプトは、専有され支配される客体であることを運命づけられている、というわけである。

このような大前提に立脚したうえで、「歴史序説」はエジプトを、大陸間交易の要地にして豊饒な土地に恵まれた国、ローマによる支配までは繁栄を謳歌してきた国、だがイスラーム化によって野蛮へと退化してしまった国だと描き、ナポレオンが率いたフランス軍の遠征目的を、つぎのように高唱したのだった——「英雄〔ナポレオン〕が望んだこと、それは、マムルークの専政を排

し、灌漑設備と耕作地を拡充し、地中海とアラビア湾〔ペルシア湾〕とのあいだの交易を絶えざるものにし、在外商館を設け、ヨーロッパの工業のなかの有用な手本をオリエントに提供すること、つまり、住民の生活条件を改善し、文明化になったあかつきに得られる恩恵を、ことごとく住民に施すことであった」<sup>6)</sup>。

文明化の手段としてフーリエが強調したものは科学だった。「(遠征によって) 科学の進歩を促すことがいかに重要なことだったか、本書を通じてそれが明らかにされるであろう」と語ったうえで、フーリエは科学の具体例を列挙する。農学に河川学、気候学、土壌学。そして新しい科学技術の導入による、織物業や染色業の革新と、製糖業やソーダ工業の育成などなど。「一言でいえば、新しく産業を立ち上げ、ヨーロッパで得られた新知見でもってそれを支援する」ことが文明化の核心だった<sup>7)</sup>。イスラーム化のせいで古代世界の文明先進国から非文明国に転落したエジプトに、18世紀フランスの世界最先端科学を伝えること、これがエジプト遠征だったというのである。

科学の普及による文明化の試みだったとして遠征を正当化したフーリエは、さらに、この試みが現地人自身からも感謝され、フランスによる統治が歓迎された、と主張する。「きわめて長期間にわたって科学が遠ざけられていたナイル河の兩岸に、科学がふたたび連れ戻されたのだった。そのことにたいして、誰もが心より感謝し」、「フランスの工業力の産物を仔細に眺め、すべての点で征服者が優っていることを悟った原住民は、自分たちを守ってくれるものとして、新政府の力にますます信頼を寄せ服従した」という。そして、総司令官ムヌの下でも「ヨーロッパの技術によってエジプトに進歩がもたらされ、産業の活性化があらゆる方面で進み」、「原住民も、フランス国民に少しずつ馴染むようになった」とされた<sup>8)</sup>。

フーリエによれば、フランスによるこのような順調な統治に水を差し、ついにはフランス軍に撤退を余儀なくさせたものこそ、宿敵イギリスの軍事介入だった——「(フランス軍が導入した) これら新しい仕組みを脅かすものといえ、本来であれば、経年によってそれ自身が陳腐化するという事態でしかあり

えなかった。しかし戦争が一瞬にして、痕跡さえ残らないほどに、それらを台なしにしてしまった。エジプト遠征が成功裏に展開され、エジプトとの交易の大発展がヨーロッパ（大陸）諸国に保証されそうな見込みに、イギリスが恐慌をきたしたのである」<sup>9)</sup>。

そしてフーリエは、フランス軍撤退後のエジプトを、野蛮に後戻りした国として描いた。フーリエによれば、「この国に学芸の光が数年間輝いた。しかし、フランス軍のおかげでようやく野蛮状態から抜け出せたこの国は、ふたたび野蛮の犠牲に供されることとなった。アラブ人〔ベドウィン〕や無規律な非正規兵による強奪、生き残りのバイ〔マムルークの頭領である州長官〕たちによる暴力行為。こうした事態に、現在のエジプトはなすすべもなく立ちつくしているのである」<sup>10)</sup>。

サイドは自著のなかで、フーリエの「歴史序説」に続いて、『エジプト誌』から3点の論説を取り上げ批判の俎上に乗せるが、それら以外にも、オリエンタリズム批評的になる論説は少なくない。小論では、そのような論説を以下に2点紹介しておきたい。

まず、土木局技師長として遠征に参加したジャック・マリ・ル・ペールが著した「紅海とスエズ地峡経由のインド洋・地中海ルートについての意見書」である。地中海とインド洋を結ぶ水路を、どこにどのように建設するのがよいのか、それを遠征時に現地調査したのがル・ペールだった。彼は、現在のスエズ運河のような直通水路の新設ではなく、ナイル河と紅海を結んでいた古来からの水路の再建を提唱した。この論説はその報告書という意味あいを持っている。

ル・ペールによれば、エジプトに住む「マホメット<sup>(マムマム)</sup>教の民族は、改良心と文明開化意欲に無縁な政府によって野蛮にも抑圧され、その結果として無知蒙昧のなかで呻吟してきた。こうして彼らは、インド交易において、北方の諸国民の活発な行動力に自力では太刀打ちできなくなった」。「しかし、ヨーロッパの開明的な大国が、勤勉な植民地社会を地中海東岸において展開すれば」事態は変わる。「喜望峰回りは、長距離で病魔にも取り憑かれがちな、不便極まりな

いルートである」ことを考えれば、地中海と紅海を結ぶ方が有利なのであって、紅海とナイル河を結んでいた古来からの水路の再建が望まれるのだった。そして、「このような大事業を成功させるには、賢明にして開明的な政府がエジプトに必要であり、これこそ、フランスがエジプトに与えようとしたものであり、記憶すべき遠征の目的はまさにここにあったのである」<sup>11)</sup>。

ル・ペールはこのように論を進めたうえで、最後はナポレオン・ボナパルトへの賛辞で締めくくる。水路建設に強い関心を持っていたナポレオンの帰国が先延ばしさえされていれば、建設が実現していた、と主張するのである——「ボナパルト將軍は、エジプトの支配者となるやすぐに、スエズ地峡に目を向け、みずから視察もおこなったのだった。地峡には、二つの海を結んでいた古代の水路の遺構があった。ボナパルト將軍がエジプトに長くとどまっていれば、おそらく、この有名な運河の再建は実現していただろう」<sup>12)</sup>。

『エジプト誌』が言祝いだフランスによる文明化は、応用科学による開発事業だけではない。地理学や天文学などの基礎科学についても、フランス最新のものが遠征によってエジプトに導入されたことが強調された。たとえば、橋梁技師ミシェル・アンジュ・ランクレの論説「フィラエ島誌」がある。

フランス軍が侵攻した最南端の地であるフィラエは、プトレマイオス朝からローマ時代にかけてさかんに建築活動がおこなわれた島だった。遠征時、イシス神殿などの遺構を目にしたフランス軍は、神殿の壁に二種類の文章を刻んだ。一つは、第一塔門の通路壁面に刻まれ、こんな内容だった——「共和暦6年<sup>メシドール</sup>收穫月13日、ボナパルト將軍麾下のフランス軍はアレクサンドリアに上陸。20日後、ピラミッドにおいてマムルークを破る。ドセー將軍が第一師団を指揮してマムルークを追撃。共和暦7年<sup>ヴァントーズ</sup>風月13日のこの日〔1799年3月3日〕、フランス軍は（第一）瀑流に到達」。

もう一つの文章は神殿東壁に刻まれた。内容は、「フランス共和国7年。パリからの経度30度34分16秒。北緯24度1分34秒」。刻んだのは、上エジプト〔カイロ以南のナイル川流域〕へ派遣された学術調査団の一行である。

ランクレは、この二つの文章が古代神殿に刻まれたことを、軍事遠征による



科学の普及の証、換言すれば文明宣布の証だと主張し、そのような文明化を推進した人物としてナポレオンを称賛し、国民としてフランス人を自画自賛したのであった。ランクレによれば――

（二つの文章が刻まれた）モニュメントは、フランス人の勇猛さを高らかに称美すると同時に、フランス人の学識の深さを晴れがましくも示している。科学と軍事がこのように一体のものとして遂行されたことは、人類史上未曾有のことであった。まさしく、大將軍にふさわしい快挙であった。野蛮国に墮した地を征服したのは、そこに文明をもたらすために他ならなかったのである。<sup>13)</sup>

サイードが持論のオリエンタリズム批評を展開するうえで、『エジプト誌』を、そしてその巻頭の「歴史序説」を資料として重視したのは、新分野を開拓しようとする研究者なら当然のことだった。「歴史序説」はもちろんのこと、ル・パールやランクレの論説のなかにも、オリエンタリズム批評の好餌になる言説が多数みられることは明白である。

しかし、「歴史序説」のなかで展開されているフランスとオリエントの優劣二項対立は、『エジプト誌』全論説 126 点に、一様に見られるわけではない。総論「歴史序説」が提示する典型から外れ、優劣の二項対立から解放された心性を垣間見せる論説も、多くはないが存在しているのである。126 点もの膨大な論文がすべて唯一の典型にのっとって書かれたと思いこむ方が、そもそもナイーヴというものだろう。編者の意図に合致しない論考が混じりこんでいる研究論文集など、ごくあたりまえにあるなのだから。

『エジプト誌』の全巻全頁を通覧した人はおそらくほとんどおらず、読まれてきたのは、せいぜいのところ、巻頭の「歴史序説」ぐらいのものだろう。サイードが目を通したのも、『オリエンタリズム』から察するに、「歴史序説」の他に 3 点の論説と、図版だけなのかもしれない。あるいは、全巻を通覧していたとすれば、オリエンタリズム批評に適さない論説が切りすてられたようである。

## 2. 反「オリエンタリズム」としての『エジプト誌』

『エジプト誌』所収論説のなかには、総論「歴史序説」とは異なり、オリエン트에劣位を一方的には割りふらない、そのような言説が紛れこんでいる。

その代表格が、テノール歌手ギヨーム・アンドレ・ヴィロトの「エジプトにおける音楽芸術の現況」である。ヴィロトの本来の任務は、遠征軍の士気を高めると同時に本国に遠征の偉業を喧伝するための歌を自作自演することだった。だがヴィロトは公務に熱心でなく、エジプト現地の楽器調査や、仕事唄などの民衆音楽と、礼拝呼びかけなどの宗教音楽の聞きとりにもっぱら時間を費やしたのだった。今で言えば、エスニック音楽学のフィールドワークである。「エジプトにおける音楽芸術の現況」は、このフィールドワークの報告書である。

アラブ音楽に出会った当初、ヴィロトの耳にそれは心地よく響かなかったようである。そのころの記憶を、彼はつぎのようにたどっている。

フランスの大音楽家たちの傑作のかずかずを味わう愉しみを、もっとも感受性が豊かな幼少の頃から身につけていた私たちにとって、エジプトの音楽と付き合うには忍耐力が必要だった。毎日、朝から晩まで聞こえてくるのは、耳を引き裂くような音楽、異様なほど不自然に抑揚される耳障りな音楽、そして、突飛で野卑で趣味の悪い装飾音ばかりだった。伴奏の楽器ときたら、貧弱で反響もしない音か、甲高く耳をつんざくような音を出すだけで、そんな音が、鼻にかかった不快な声とごちゃごちゃになっている。これが、エジプト人の音楽について私たちが抱いた最初の印象だった<sup>14)</sup>。

このように当初はアラブ音楽を軽侮していたヴィロトだったが、時を経るにつれ彼は、フランス音楽の魅力とはちがった、アラブ音楽独自の魅力を発見する。最初の印象が語られたのち、つぎのように報告書はつづく。

私はエジプトで、趣味も良く才気もあるヨーロッパ人と知り合ったが、彼らによると、この国に滞在し始めた数年間は、アラブ音楽に最大級の嫌悪

感を覚えたという。ところが、住んで18年、20年にもなると、それに慣れ親しみ、以前にはまったく気づかなかった美をそこに発見し、ついには快感となるにいたったという。なるほどそうだと、私は納得した。アラブ音楽は、異様で野蛮なものに最初は思われるが、実際はそういうものではないのである<sup>15)</sup>。

ヴィロトはさらに、フランス人側が謙虚になれば、フランス人はアラブ音楽からあらたな着想を得ることができる、とも主張する。音階と音程に関しては「アラブ音楽の法則の方がフランス音楽の法則よりも規則正しい」と指摘し、そこからつぎのような主張を展開するのである。

この指摘は、私たちの自尊心がどれほど傷つくにしても、真実に忠実であろうとするなら認めなければならない。優れた人間が多い今日、勇気ある天才がこれを認めれば、わが国における音楽理論のなかから誤謬や偏見の錆が落とされていくだろう。こういった誤謬や偏見は、前世紀までの無知と野蛮さの表れなのである。さらにまた、優れた音楽家たちがこの指摘を受け入れれば、彼らの情熱はいっそう燃え上がるだろう。そして、旧套墨守の精神によって偏狭な世界に閉じこめられ、悪趣味によって陵辱され、無節操な気まぐれで責め苛まれている音楽が、その情熱によって救い出されるだろう<sup>16)</sup>。

『エジプト誌』の数多くの論説のうち、優劣の二項対立的典型から逸脱し、アラブ・イスラーム社会の現実のなかには瞠目すべきことがあると語ったのは、ヴィロトの論説だけではない。薬剤師ジャン・ピエール・ブーデの論文「エジプト起源のガラス技術に関する小史」にも、そのような語りが織りこまれている。古代エジプトのガラス製造技術がヨーロッパに伝わり、その地でさらに発展をとげた一方で、エジプトでは技術の停滞がみられると、ブーデはまず主張する。しかしブーデは、アラブ人の器用さにも言及するのである。「エジプトの労働者は、仕事ぶりから判断して、思われているよりもずっと器用さに恵まれている。図面を描いて見せると、そのとおりのとても素晴らしい蒸留器を作ってくれた金物師がいるかと思えば、ガラス職人は、とても美しい瓶や

球形フラスコ、レトルト、誘導管などを作ってくれた」というのだ<sup>17)</sup>。

さらにブーデは、アラブ人のガラス職人が経済合理性にもとづいて行動していることを認めもした。「エジプト人の用いる塩化アンモニウム製造用フラスコは屑ガラスからできているものだから、われわれは、エジプト人を無知で不器用な人間だと、つい思ってしまった」。しかし、「これは経済法則に従ったまでのことだとすぐに判った」というのである。つまり、「精錬のためのこのフラスコは、封泥して使用されるものなので、その原料の質が良かろうと悪かろうと関係がないのだ。安く作れるフラスコが好まれていたのには、このような理由があったのである」<sup>18)</sup>。

機械製図技師フランソワ・シャルル・セシルと地図作成技師エドメ・フランソワ・ジョマールの二人がおもに分担執筆した「工芸に関する図版の説明書き」にも、オリエントの技術を高く評価する語りが多数見うけられる。たとえばセシルは、サトウキビ圧搾機を取りあげ、エジプト人の豊かな工夫の才をこんなふうに着賛した——「サトウキビ圧搾機は、完璧さに少し欠ける点があったり、動きが粗雑だったりするとはいえ、エジプト人の知能の高さを良く示している。力学の諸法則を識らず、機械の力を測る技術にも長けていないのだが、エジプト人は、直径が異なるために回転速度が違う二つの歯車を用いる場合はシリンダーの直径もそれぞれ異なるものにしなければならない、ということを経験で会得している」<sup>19)</sup>。

もう一人のジョマールは、オリエントの技術にたいして同僚のセシル以上に好意的で、フランスの技術と比較してその優秀さを強調した。たとえば刺繍がそうだ。ジョマールによれば「エジプト人の刺繍技術は、高度に磨き上げられたものである。ほとんどあらゆる布に刺繍が施される。……(中略) 皮革にも完璧な技でもって刺繍が施される。ヨーロッパでは、銀箔を巻きつけた絹糸で皮革への刺繍がおこなわれるのだが、エジプト人は、とても薄い金箔を巻きつけた丸い銀線を用いる。そのおかげで、この種の刺繍はヨーロッパの物よりもずっと輝きがあり、しかも長持ちする」<sup>20)</sup>というのである。

手足の器用さと、それと関連する足の健やかさについても、ジョマールはエ

ジプト側に軍配をあげるのだった。ジョマールは理髪師を例に取りあげながら、こんなふうに語る——「エジプト人理髪師の敏捷で巧みな手さばきは、称賛に値する。彼らが頭全体を剃り上げるのに要する時間は、ヨーロッパの理髪師が顎を剃るのに要する時間よりもずっと少ない」<sup>21)</sup>。そして足についてはこうだ。

この国の人間は、たいてい裸足ですごし、さまざまなことに足を使う。足の指は、束縛されず自由で、外気にさらされ、よく洗われていていつも清潔なので、生来の柔軟性と運動性を保つと同時に、絶えず動かされるものだから、頑丈でもある。足の指で、道具を握ったり、道具をある一点に静止させ続けたり、必要な場所に道具を移動させたりさえできる、非常に優れた能力を持つ労働者もいる。こういったものとは別の利点も、エジプト人は享受している。締め付ける靴を履くヨーロッパ人とは違い、足と爪が変形せず、非常によい形をしているのである<sup>22)</sup>。

健康な足と器用な手足に瞠目するだけでなく、オリエントの優れた技術を学ぼうという姿勢さえ、ジョマールには見うけられる。石膏製造技術について、ジョマールはこんなふうに主張している。

（カイロの）石膏製造用カマドは、パリ周辺のものとまったく違い、燃料が少なくて済む工夫がなされていてずっと経済的である。また、製造時に発生する煙は健康に悪いことが知られているが、カイロのカマドでは極めて少量しか発生しないので、カマドが町中に置かれていても、わが国のものと違って不快感を与えることがあまりない。……（中略）石膏が焼き上がると、パリ周辺でおこなわれているように手で叩いて粉にするのではなく、花崗岩の石臼からなる粉碎器が用いられる。この方式だと、わが国式では避けられない不都合も生じない。石膏粉混じりの空気を吸い込まなくても済むのである。フランス式は、野蛮きわまりない。経済性からいっても、労働者の健康面からいっても、エジプト人のやり方は、取り入れるに値するものである<sup>23)</sup>。

『エジプト誌』にはジョマール単著の論文が4点収載されていて、そのうち

の一篇「カイロの市街と城塞」でも、アラブ人のさまざまな技法が高く評価されている。製粉技術は「単純だが良く工夫されていて」、石工の「道具は粗末だが、巧みな技術がそれを補っており」、木製の錠前も良く工夫されていて「あるフランス人技師がその技術をフランスに導入しようと考えた」ほどだったという<sup>24)</sup>。

さらに、フランスよりエジプトの方が優れているとジョマールが特筆しているものが一つある。初等学校における教育方法である。「カイロにおける読み書きの初等教育方法は、わが国の村のものだけでなく、ヨーロッパの都会のものと比べても優れている」というのである。「ヨーロッパ式の個別指導ではなく、全生徒一斉指導がカイロではおこなわれており、さらに、読みながら書く、つまり声に出しながら単語の音節を書くという、注目すべき方式が採られている」というのがジョマールの見立てだった<sup>25)</sup>。

実際にどちらの教育法が優れているのか、それは重要でない。肝腎なことは、ジョマールがエジプト式に軍配を上げたことである。行司差し違えなのかもしれないが、このように判断した時のジョマールが、オリエントを劣位に置く心性から免れていたことだけは確かである。

オリエントの技法を軽侮せず、それから学ぼうとする姿勢は、外科医長として遠征に従軍したジャン・ドミニク・ラレーの論説「エジプトおよびシリア遠征時にフランス軍が罹患した病気に関する観察と報告」にも見てとれる。ラレーは、現地の慣習や医術のなかに、迷信として排斥すべきものだけでなく、健康管理や治療に利用しうるものも、努めて偏見ぬきに見いだそうとした人物であった。たとえば、イスラーム社会で飲酒が禁じられていることを、ラレーは合理的な準則だと考えた——「エジプトで葡萄酒を大量に飲んだり、アルコール度の高い蒸留酒を飲むと、たいてい健康を損ねてしまう。したがって、クルアーンが飲酒を禁止しているのは正しいことである。蒸留酒は消化器官を刺激し傷つけるものであり、それが、消化器官を過敏にさせる暑気とあいまって肝炎を引き起こすのである」<sup>26)</sup>。

さらにラレーは、アラブ人のおこなう対症療法のなかに、ヨーロッパ式医療

と比較して、見るべきものがいくつかあることに気づきもした——「医者と呼ばれる人びとには、体外からの治療において、有効な技術が身に付いていることが認められる。ヨーロッパではおそらくあまりにもなおざりにされている、灸や乾布摩擦、油を用いたマッサージ、蒸気風呂の後のマッサージなどである」<sup>27)</sup>。

事実、アラブ人の医療技術をラレーが実際に採用した事例が、この論説のなかで報告されている。1799年6月、シリア戦役からの撤退時に発生した奇病に関する報告である。砂漠の行軍で渇きに苦しむフランス兵たちが、ようやく見つけた沼の水を飲んだところ、しばらくして咽頭部に激痛を感じ、やがて重篤な呼吸困難にいたって数名が死亡したという事件である。現地のアラブ人に尋ねたところ、水のなかに小さな蛭がいて、現地人は飲まないけれども、馬が時折飲んで同様の症状を呈するということだった。ラレーは、現地人が馬に施す治療法をまねてフランス兵患者の命を救うことができた。ラレーによれば、「この地方の既係は、特別仕立ての挟み道具を使って巧みに蛭をつかみ出すのだった。蛭が喉の奥の方に入ってしまった場合は、まず塩水を馬の鼻に注入して蛭を這い出させた」という。さすがにフランス兵患者にたいしては、鼻に塩水が注入されることはなく、うがいですまされたのだが、基本的には馬にたいする治療法が採用されたのだった<sup>28)</sup>。ラレーがアラブ人の医療技術を問答無用で斬り捨てて人間であつたら、手当が遅れて多数のフランス兵の命が蛭に奪われていたかもしれない。

オリエントから技術を学ぼうという姿勢は、薬剤師ピエール・シャルル・ルイエの論説「エジプトにおけるカマド式孵卵技術に関する報告」のなかにも見てとれる。家禽用のカマド式孵卵器および育雛器が注目されたのである。ルイエは、人工孵卵の試みがフランスではことごとく失敗に終わってきた一方で、エジプトにおいては人工の孵卵技術と飼育技術が確立されていること、そして、鳥肉の安価かつ安定した供給のためにフランスへの技術移転が必要であることを、つぎのように語るのだった。

エジプト人のやり方がいつも失敗しないのは、そのやり方を中傷する人た

ちの主張によれば、エジプトの気候が恵まれているからにすぎない。しかしそれだけではないのである。卵と雛を管理する人間が独特な巧妙さを発揮し、それが、成功に何よりも寄与している。……(中略) エジプト人が秀でているのは、卵を孵す技術だけではない。親鳥の助けなしに雛鳥を育てる方法にも通じている。……(中略) カマド式の孵卵器と育雛器からエジプト人が得ている利益を考えると、ヨーロッパ、とりわけフランスでこの技術が確立されていないのは残念なことである。エジプトと同様な技術をフランスで実行に移すことは可能だろう。なんらかの処置さえおこなえば、人工孵化は可能である。難しいのは雛鳥の飼育技術である。……(中略) 人工孵化させ、さらに親鳥による世話なしに雛鳥を飼育するためには、エジプト人の単純で巧みな方法を、なんらかのやり方で身につける必要がある<sup>29)</sup>。

『エジプト誌』所収論文がオリエントを高く評価したのは、音楽や産業技術といった技法の面についてではなかった。論説「現代エジプト住民の慣習」を執筆した土木技師アントワヌ・シャブロール・ド・ヴォルヴィクは、ムスリム住民の生活のありようそのもののなかに、さまざまな美質を発見している。たとえば、商道德の高さをこんなふうに語った——「オリエント人の両替商は不正直だ、という評価がわれわれの間では一般的だろう。しかしこれは不当な批判だと思う。エジプトでは、衡器を検査する役人も、そもそも両替商自体も、厳格で公明正大な人たちとして高い声価を得ている。慎重さを要するこういう職務に関して、不公正があったというスキャンダルは、ほとんど聞かれない」<sup>30)</sup>。

商人だけでなく住民のほとんどが金品に関して清廉潔白であることにも、シャブロール・ド・ヴォルヴィクは感心せざるをえなかった。「使用人が主人の物を盗んで困る、という事態はまずおきない。まったくないというわけではないが、たいへん珍しいことだ。これだけでも驚くべきことだが、たいへん高価な商品を扱っている店が粗末な木製の錠前だけの戸締まりで済ませていることには、もっと驚かされる」というのである<sup>31)</sup>。シャブロール・ド・ヴォルヴィク



は、オリエント人の本質なるものを強欲とみなす見地からかけ離れた地点に立っていた、といえるだろう。

たんに廉直というだけではない。シャブロール・ド・ヴォルヴィクはムスリムを、慈善精神にあふれる人びとだと考えてもいた。とりわけ初等教育の場においてそのような精神が見られるという。金持ちの子弟と貧しい者とが一緒に学んでいることを指摘したうえで、そのような学校の運営が資産家たちの寄付金に基づいていることをシャブロール・ド・ヴォルヴィクは賛美するのだった。

公共の学校は慈善金のみで運営されていて、しかも、ある程度の規模の町にはかならずと言っていいほど、こういった学校がたくさんある。これは驚嘆に値する事実である。資産家たちはたいがい、子供に遺しうる財産から一部を差し引き、それを学校の創設や維持のために提供する。金品を惜しまない一個人の献身が、政府の犯罪的ともいえる無関心を埋め合わせているのである。……(中略) 学校の運営に提供される資金が多額にのぼる場合がままあり、貧しい子供たちの給食や衣服、授業料にそれが使われることもある<sup>32)</sup>。

そして、生徒たちが家から持参してきた弁当を出しあい、それを平等に分けて昼食をとる習慣に、シャブロール・ド・ヴォルヴィクは瞠目するのだった。彼には、このような良俗に満ちた社会が野蛮な社会だとはどうしても思えない——「この習慣は、真理を見きわめた社会にして初めて可能なものに違いないのだが、まさにムスリムの間でごく普通に見られるものである。こうして彼らムスリムは、適切にも若いうちから隣人愛を身に付け、そしてその善行心は、宗教上の戒律にも助けられ、年齢を重ねるごとに大きくなるのである」<sup>33)</sup>。

ムスリム社会のなかに慈善精神を認めたのは、シャブロール・ド・ヴォルヴィクだけではない。前掲のジョマール論説「カイロの市街と城塞」にも、この種の精神への言及がある。シャブロール・ド・ヴォルヴィクが学校に注目したのにたいし、ジョマールは、無料の水飲み場がカイロ市内に多数整備されていることに驚いたようだ。彼が実見したものだけで 245 ヲ所あったという。ナイル河の水がロバによって市中の水飲み場まで運ばれ、住民がそこで水を必要なだけ

無料で手に入れられることと、運搬費用と水飲み場の設置・維持がすべて資産家の自発的喜捨によって賄われていることを指摘したうえで、ジョマールは、ヨーロッパの現状にも言及しつつ、こんなふうにアラブ人の慈善精神を総括している——「カイロと同じぐらい多数の公共泉水が設けられている都市は、おそらくヨーロッパのどこにもないだろう。……（中略）たいへん有益なこの設備は相当な数に達しており、このことは、普通考えられている以上に慈善精神がオリエントで広く行き渡っていることを証明している」<sup>34)</sup>。

慈善事業が貧富差の固定など、既成体制の維持に役立つことは論をまたないだろう。しかし小論が問題にしているのは、慈善事業そのものの当否ではなく、慈善事業にからんでフランス人がつけたオリエント評価の中身である。高い評価点をつけたシャブロール・ド・ヴォルヴィクのその心性は、慈善事業の当否と切り離して検討すべきものだろう。

シャブロール・ド・ヴォルヴィクの論説に戻ろう。彼はムスリムのなかにもう一つ美質を発見している。新発見の美質だった。従来のものとは一八〇度異なるムスリム論を彼は展開したのである。モンテスキューの『法の精神』など18世紀フランス知識人の書物は、喜怒哀楽を顔に出さず何事にも無関心であるようなムスリムの表情に宿命主義を読み、イスラーム批判を展開してきた。「宿命からは決して逃れることができないとするドグマのために、どのようなことにも無関心」（『法の精神』24篇11章）というわけである。モンテスキューにかぎらず、ヨーロッパの知識人がイスラームを批判するときの常套手段がこの宿命論だったことに、多言は要しないだろう。ところがシャブロール・ド・ヴォルヴィクは、無関心そうな顔つきをムスリムがしている原因の一部を宿命主義に帰しつつも、体制に批判的だと誤解されないように何事にも無関心を装うことが専政下の処世術であることを強調し、さらに、関心事がまったくなさそうな表情の裏を、こんなふうに読んだのである。

無表情な外見の下には、豊かな想像力が隠れている。エジプト人を何事にも無感覚な人たちだとみなすのは正しくない。それどころか、彼らの感覚は研ぎ澄まされている。それは、沈黙が習慣となっているおかげで集中力

が高まるからなのだろう。また、何事にも恐れず行動することが時おり彼らにはあるが、これも沈黙のおかげで魂に一種の活力剤が注入されるからである。頭の回転が遅いことの欠点は、黙思による洞察力の深さという長所で十分補われている。まったくの無関心と無気力の淵に沈んでいるとばかり私たちが思い込んできたこの人たちには、じつは最高級の記憶力と注意力が宿っているのである<sup>35)</sup>。

シャブロール・ド・ヴォルヴィクはフランスとエジプトとを比較し、後者の方を持ちあげることさえあった。老人への敬愛、という問題をめぐってである。「遠慮して父親の前では息子たちが煙草を吸わない」ことからはじまって、「老人の意見に皆が静かに耳を傾け尊重し」、「死の床にある親を前にして遺産争いをせず」「親の墓に子供が涙を流す」ことにいたるまで、家庭でも社会でも年長者が敬われていることをさまざま指摘しながら、シャブロール・ド・ヴォルヴィクはこんなふうに東西比較論を展開する。

オリエントの諸民族が老人にはらっている深い敬愛こそ、この世でもっとも称賛に値するものではないだろうか。とりわけエジプト人はこの立派な心根において秀でている。……(中略) 一方、真理をわきまえ全体を見通しうる人間なら、ヨーロッパの諸民族を非難するはずだ。産業と知識の面ではすべてにわたって驚くべき完成度に達したヨーロッパで、老人があまりにも冷淡に取り扱われているからである。……(中略) イスラームの国々で老人に対して払われている尊敬の念を目にすれば、ヨーロッパ人といえども感嘆せざるをえない。われわれから「野蛮人」という蔑みの言葉で呼ばれている人たちが、美德のなかでも最上のものである敬老の範をわれわれに示している。われわれの間では実践されることが少なくなってきたが、もっとも高く評価されてしかるべき美德である<sup>36)</sup>。

奴隷制度のありようについても、シャブロール・ド・ヴォルヴィクはオリエントにたいしてよりもヨーロッパに批判的だった。同じ奴隷制でも、オリエントの方がはるかに人道的だというのである――

奴隷を使用しているとしてオリエントの諸民族を非難することがどれほど

正当なことにせよ、その非難はおそらくヨーロッパ自身に大きく跳ね返ってくる類のものだろう。オリエントを非難することは、ヨーロッパがこれまでおこなってきた恥ずべき取引の一つ一つを厳しく俎上に載せることに繋がるのだから。新世界の植民地が、そしてアフリカ沖の島々が、文明的になったはずの民族のせいで、野蛮行為の舞台となってきた。神聖な人権を侵害してきたその甚だしさと醜悪さにおいて、ヨーロッパはオリエントをはるかに上まわっている。文明の名を辱めることだが、どうしてもはっきり言明しておかなければならないことがある。レヴァント諸国におけると同様にエジプトにおいても、奴隷の境遇は、アメリカの場合と比べて非難されるべきところが少ない、という事実である。アメリカにおいては、冷酷な金儲け主義者の農場が奴隷の汗と血によって潤されている。一方エジプトでは、奴隷は家族の一員として迎え入れられ、家事以外の仕事は割り当てられない。……(中略) (エジプトでは) 主人が暴力等で法律と人倫に反する行為を奴隷に対してなすに及べば、奴隷はカーディー〔裁判官〕に訴え出ることができる。そしてカーディーは、事の重みを判断し、奴隷を別の人物に譲渡するよう強制する場合もありうる。……(中略) おおむね奴隷の取り扱い方は大変丁重で、しかも、大概の場合、数年たてば奴隷身分から解放される。主人が死んだ場合も、たいていは自由身分となる<sup>37)</sup>。

エジプトでは奴隷の取り扱いが人道的なだけではない。社会が解放奴隷に注ぐ眼差しも、ヨーロッパやアメリカとちがいがエジプトでは暖かい。そのことをシャブロル・ド・ヴォルヴィクは力説する——「オリエントでは解放奴隷が出世し最高の栄光を手に入れることも珍しくないのです、元奴隷であったからといって世間から蔑視されることは決してない。元奴隷と姻戚関係を結ぼうと望む人間はたいへん多い。オリエント以外の諸国では汚名でしかない解放奴隷という肩書きは、エジプトでは一種の推薦状になるのである」<sup>38)</sup>。

エジプト遠征をさかのぼること4年前の1794年2月4日、フランスの国民公会は、植民地における奴隷制の廃止を決議した。しかし、ナポレオン体制

下、1802年5月20日の法令で黒人奴隷貿易の再開が決定された。つまり、エジプト遠征時には奴隷制廃止が一応の国是となっていたフランスだったが、シャブロール・ド・ヴォルヴィクがこの論文を執筆していた頃は、奴隷制がふたたび国是となっていたのである。「現代エジプト住民の慣習」は、そのような国是に異議を申したてるものではない。奴隷制の存続を容認したうえで、人道主義の立場からその改善を訴えているにすぎない。そもそもフランス植民地を名指しせずヨーロッパとアメリカの問題として奴隷制を批判しているところに、ごまかしとナポレオン体制へのおもねりがある。今日の地点から裁断すれば、たしかにシャブロール・ド・ヴォルヴィクは批判されてしかるべきだろう。だが、東西の奴隷制を比較し前者の方が人間的だと考えたかぎりにおいて、彼が自民族中心主義から免れていたことも確かである。

シャブロール・ド・ヴォルヴィクが現地住民の生活のありように注いだ眼差しを、最後にもう一つ検討しよう。非定住アラブ人であるベドウィンの生活様式が称賛されるのである。デルタ地帯西部に住む一集団を例にして、ベドウィンの美德が数えあげられる。「すべてのアラブ人〔ベドウィン〕に共通している、節度ある食生活という美德」と、「分け隔てなくすべての人を受け容れてくれる、大いなる歓待心」というぐあいである。ベドウィン女性が布で顔を隠していることも、シャブロール・ド・ヴォルヴィクには、「客人に対して敬意を表すため」の心遣いだと思われるのだった。そして、ベドウィンの生活様式を模範とすべきことをシャブロール・ド・ヴォルヴィクは訴えてやまない——「ヨーロッパではアラブ人〔ベドウィン〕を冷酷な野蛮人だと見なしているが、彼らの生活を細部にわたって見ていくと、そのような評価がいかに不当なものが判る。彼らを頻繁に訪れたわれわれは、彼らが、質素な生活を尊び素朴という美德を失っていない誠実な人たちであることを証言できる。……（中略）彼らの生活習慣は、他のアラブ人部族も同様だが、文明化したはずの国民にかぎらず誰にとっても見習うべき手本といえるのではないだろうか」<sup>39)</sup>。

『エジプト誌』には、このようなベドウィン賛美論を展開する論説がもう一点紛れこんでいる。機械技師として遠征に参加したジャン・マリ・ジョゼフ・

エメ・ドゥボワの「エジプトの砂漠に住まうアラブ人部族」だ。シャブロール・ド・ヴォルヴィク論文とちがい、ベドウィンの「美德」を称賛するだけにとどまらず、文化相対主義を先取りしている論文でもある。ドゥボワによると、「(ベドウィンたちの) 行動様式は、人類全体の名誉となるものであって、たいへん誠実な人たちからなるこの民族を、われわれフランス人は悪し様に言うべきではないだろう。ところがわれわれは、彼らの悪徳にもっぱら目をやり、美德を見ようとはしない。そもそも美德自体が、どの民族でも同じというわけではない」のだった。「交戦相手国生まれの人間でも旅行者であれば殺害どころか身ぐるみ剥ぐこともしない」というのがフランス人の美德。しかし「砂漠のアラブ人たちは、自分たちの部族と無縁の者に対しては、その持ち物を奪い、時には殺めたりもする。こうして手に入れる品物が、いわば国の収入源となるからである。したがって、もっとも多く獲物を確保した者が、もっとも尊敬されることになる。その一方で、かつての加害者が別の部族によって襲われる側にまわり、自分たちのもとに逃げ込んでくると、何をさしおいても手厚くもてなすのである。いったん天幕に迎え入れると、無償で食べ物を与え、その人間の命を守るために部族全体が戦も辞さない」というのが、ベドウィンの悪徳と美德であった。そしてドゥボワは最後に、自身の体験をこのように語るのだった——「兵隊の護衛なしに、アラブ人と旅をしたり数ヵ月まるまる彼らと過ごしたことが、私にも、エジプト学芸委員会〔遠征に同行した学者集団による組織〕委員の他のメンバーにも、何度もあった。そしていつも、私たちの寄せる信頼が裏切られることはなかった」<sup>40)</sup>。

### 3. 「オリエンタリズム」を越えて

『エジプト誌』は、その全体としてはオクシデント・オリエントの優劣二項対立の色合いが濃い。サイードのオリエンタリズム批評が、そういう二項対立が展開されているものとして『エジプト誌』を論難することは見当外れではない。むしろ、事実の大部分を正確についでいる。

しかし、小論の2節でみてきたように、こうした二項対立から自由になっている論説も『エジプト誌』には散見される。サイドがそうした論説を偶然に読み落としたのか、読んでいたが自著ではあえて取り上げなかったのか。どちらであったかは分からないうえに、それは今となっては重要なことではないだろう。重要なことは、二項対立の心性である「オリエンタリズム」を、未来の社会でどのように克服すればよいのかを考えることだろう。

克服戦略は、すくなくとも二つある。森のなかの木の差異を重視せず、木をすべて根こそぎにして森を消滅させるかのように、批判だけに心がけるというのが一つだ。この戦略のなかでは、2節で取り上げたような言説は無視されるか、いたって後ろ向きな評価しかあたえられない。そうした評価の一つに、エキゾチシズム異国趣味にすぎないという批判がある。

異国趣味が批判される場合は、なぜ異国趣味が問題なのかは、まず説明されない。説明される場合でも、異国趣味は他者をありのままの姿で表象していない、という点が強調されることが多い。異国趣味を批判する論説の一つに、椎名亮輔「近代西欧音楽におけるエグゾティスムの諸相」がある。椎名はフランス人フェリシアン・ダヴィッド作曲の『砂漠』〔一八四四年初演〕について、こう主張する。「この種の西洋音楽は実際のアラビア音楽の豊饒さと比べものにならない」。「ニュアンス豊かな旋律音は半音の単位で置き換えられねじ曲げられ」、「さまざまな表現方法をとる発声法や歌い方はベル・カントの一本調子な歌で置き換えられ」、アラビアの楽器は「音色の点で及ぶべくもない」西洋楽器に替えられ、「形式の点でもアラビア音楽の精妙さは、ABAの三部形式の粗雑な単純さで損なわれて」いるというのである<sup>41)</sup>。

アラブ音楽に精通している専門家が『砂漠』を聞けば、たしかに奇妙なアラブ風なのだろう。しかし、ダヴィッドは1833年から約2年間カイロで生活したフランス人にすぎない。そのような人物に、アラブ音楽の精髓をマスターしていないという批判を浴びせるのは酷ではないだろうか。そのうえ、なぜアラブ音楽を直輸入する必要があるのだろうか。文化の交流とは、直輸入を意味しないはずだ。アラブ音楽から感興を得て西洋音楽が豊かになる、ということが

文化交流なはずだ。

森を消滅させるのではなく、植生を変えていくことで森を無害なものにすることも、考える手段の一つなのではないだろうか。森のなかに紛れこむようにして生えている有益な木を注意深く発見し、それを大きく育てていくということだ。このような提言は、すでにイギリス帝国史研究ではおこなわれている。帝国主義の社会史研究をリードしてきたジョン・マッケンジーの『大英帝国のオリエンタリズム——歴史・理論・諸芸術』（平田雅博訳、ミネルヴァ書房、2001年。英語版1995年）である。19世紀を中心に、オクシデントの絵画・建築・音楽・演劇などの諸芸術が、オリエントからの創造的刺激によって活性化した事実と、オクシデントとオリエントの優劣二項対立にとどまらない多様なオリエンタリズムが存在してきたことを、マッケンジーは強調してやまない。たとえばダヴィッドの『砂漠』について、酷評した椎名とは異なる評価をマッケンジーはくだす。「共感的な光明の下で」、「オリエントへの畏敬と愛情の観点から書かれたことは確かである」というのだ<sup>42)</sup>。そしてマッケンジーは、大著をつぎのように締めくくる——「今日オリエンタリズムを批評する人々は、あまりに強引な画一化を冒しやすい。過去に関して一枚岩的で二項対立的なヴィジョンを創り上げることで、彼らが未来のより共感的な基盤に立とうとする、異文化間の関係にしばしば過度の損害を与えてきた。実際のところ、オリエンタリズムは、軽蔑と侮辱ばかりかしばしば称賛と畏敬にも使われ、無限の多様性を持つものであった」<sup>43)</sup>。

マッケンジーの提言をエジプト遠征研究に適用すると、着目すべきは、サイドが批判してやまない『エジプト誌』ということになるだろう。音楽家ヴィロトの記憶、地図作成技師ジョマールの記憶、そして土木技師シャブロール・ド・ヴォルヴィクらの記憶……。それぞれみな、優劣の自他意識から解き放たれている。

サイドの『オリエンタリズム』は、オクシデントに根深いオリエント差別の心情を読み解いた点で、すぐれた仕事であった。問題点をえぐり出したという点で、その克服に向けた大きな一歩がサイドによってしるされたのであ



る。

この先に必要な新たな一步は、ヴィロトラのような、優劣の自他意識から解き放たれていた人々を歴史のなかから発掘し、なぜ彼らの優劣意識は溶解したのかを問うことにある。そして、おそらくその答えは、エジプト社会との接触のおかげでアラブ人とその社会を見る眼差しが変容した、ということにつきるだろう。先述したヴィロトの言葉が、この変容の過程を教えてくれる——「私はエジプトで、趣味も良く才気もあるヨーロッパ人と知り合ったが、彼らによると、この国に滞在し始めた数年間は、アラブ音楽に最大級の嫌悪感を覚えたという。ところが、住んで18年、20年にもなると、それに慣れ親しみ、以前にはまったく気づかなかった美をそこに発見し、ついには快感となるに至ったという。なるほどそうだと、私は納得した」。エジプトで生活し現地人と交わったからこそ、彼の眼差しは優劣意識から自由になりえたのである。

およそ200年前に断行されたエジプト遠征は、戦禍をエジプトにもたらしたが、フランス人とエジプト人との交流ももたらした。人的交流の価値をあらためて教えてくれているのが、その報告書『エジプト誌』である。

## 注

- 1) サイード『オリエンタリズム』平凡社, 4, 1986.
- 2) オリエンタリズム批評に関する総論としては、杉本淑彦「オリエンタリズムとポストコロニアリズム」金澤周作監修『論点・西洋史学』ミネルヴァ書房, 284~285, 2020を参照.
- 3) サイード, 前掲書, 87, 126.
- 4) 同上書, 84, 86.
- 5) Jean-Baptiste Joseph FOURIER, «Préface historique», *Description de l’Egypte*, t.1, i-ij, 1821.
- 6) Ibid., ix-ixj.
- 7) Ibid., lxiii-lxiv.
- 8) Ibid., lxiv, lxxxiij-lxxxiv, cxvij, cxix.
- 9) Ibid., cxix-cxx.
- 10) Ibid., cxxvj.
- 11) Jacques-Marie LE PERE, «Mémoire sur la communication de la mer des Indes à la

- Méditerranée, par la mer rouge et l'isthme de Soueys», *Description de l'Égypte*, t.11, 48-49, 52, 1822.
- 12) Ibid., 279-280
  - 13) Michel-Ange LANCRET, «Description de l'île de Philae», *Description de l'Égypte*, t.1, 18, 1821.
  - 14) Guillaume-André VILLOTEAU, «De l'état actuel de l'art musical en Égypte», *Description de l'Égypte*, t.14, 114-115, 1826.
  - 15) Ibid., 115-116.
  - 16) Ibid., 111-112.
  - 17) Jean-Pierre BOUDET, «Notice historique sur l'art de la verrerie, né en Égypte», *Description de l'Égypte*, t.9, 235, 1829.
  - 18) Ibid., 237.
  - 19) François-Charles CECILE/Edme-François JOMARD, «Explication des planches des arts et métiers», *Description de l'Égypte*, t.12, 419-420, 1823.
  - 20) Ibid., 457.
  - 21) Ibid., 478.
  - 22) Ibid., 487.
  - 23) Ibid., 402.
  - 24) Edme-François JOMARD, «Description de la ville et de la citadelle du Caire», *Description de l'Égypte*, t.18-II (2 e partie), 375, 391, 395, 1829.)
  - 25) Ibid., 337.
  - 26) Jean-Dominique LARREY, «Mémoires et observations sur plusieurs maladies qui ont affecté les troupes de l'armée française pendant l'expédition d'Égypte et de Syrie», *Description de l'Égypte*, t.13, 116-117, 1823.
  - 27) Ibid., 206.
  - 28) Ibid., 106-108.
  - 29) Pierre-Charles ROUYER, «Mémoire sur l'art de faire éclore les poules en Égypte par le moyen des fours», *Description de l'Égypte*, t.11, 422, 425-427, 1822.
  - 30) Antoine CHABROL DE VOLVIC, «Essai sur les mœurs des habitants modernes de l'Égypte», *Description de l'Égypte*, t.18-I (1 er partie), 42-43, 1826.
  - 31) Ibid., 131.
  - 32) Ibid., 65.
  - 33) Ibid., 63.
  - 34) JOMARD, *op.cit.*, 335.
  - 35) CHABROL DE VOLVIC, *op.cit.*, 31-32.
  - 36) Ibid., 38, 174, 177-178.

- 37) Ibid., 250-251.
- 38) Ibid., 254.
- 39) Ibid., 140-141, 143-144.
- 40) Jean-Marie-Joseph-Emet DUBOIS, «Sur les tribus arabes des déserts de l'Égypte», *Description de l'Égypte*, t.12, 348-349, 1823.
- 41) 椎名亮輔「近代西欧音楽におけるエグゾティスムの諸相」『講座・20世紀の芸術 1：芸術の近代』岩波書店, 161-162, 1989.
- 42) マッケンジー『大英帝国のオリエンタリズム』ミネルヴァ書房, 243, 2001.
- 43) 同上書, 338-339.